

POLAND MONTHLY / BIULETYN POLSKI

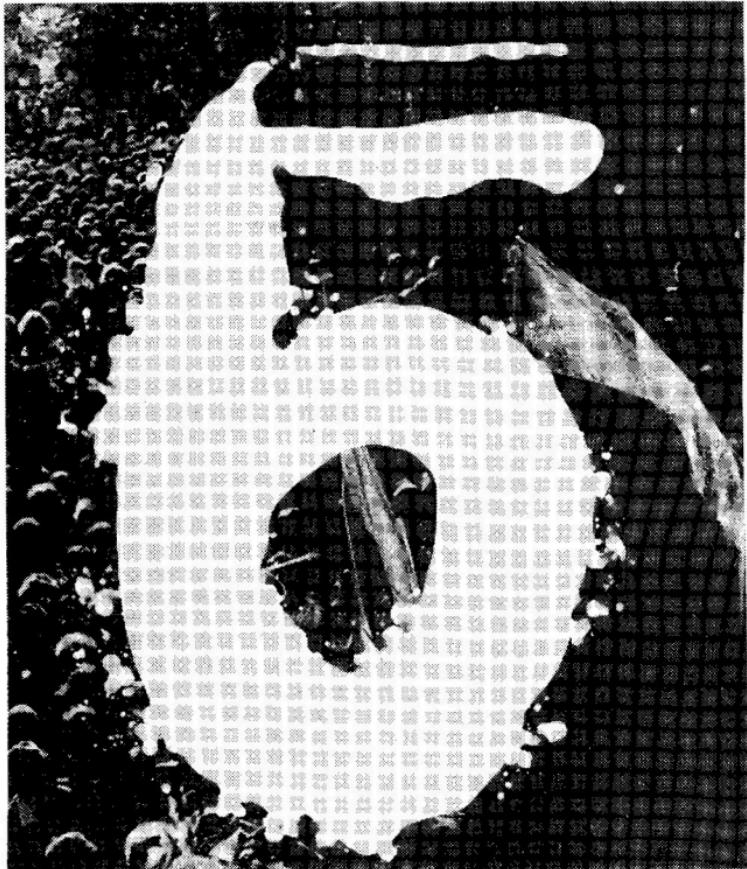
1986年

10月号  
(通巻55号)  
400円

# ポーランド月報

ポーランドの光——「連帯」

第10回党大会



恩赦とグダンスク協定6周年について	3 チェルノブイリ後：
T K K 声明	
ポーランドの光——「連帯」	原発の危険性をめぐる論争 ..... 16 工藤幸雄 ..... 4
6年ぶりの人と街	官製労組とは非協力を
正常化の総仕上げ？ 第10回党大会	西ドイツ社会民主党に対する公開状 ..... 18
第10回党大会を前に 地下紙から ..... 8	一層の協力を
党大会への手紙 A・ミニク ..... 10	チェコ反対派にあてた手紙 ..... 19
ヤルゼルスキ将軍のポーランド ..... 13	「連帯」運動の与えたもの 前田裕暗 ..... 20
ありし日のリビンスキ教授 J・クーロン ..... 14	ポーランド日誌 ..... 2 / 22・23
エドワルト・リビンスキ略歴 ..... 15	

**ポーランド日誌**  
 1986年7月2日～9月2日

7月2日 6月29日から開かれていた統一労働者党第10回党大会4日目、党規約改正内容が一部明らかになる。前回大会（81年7月）で採用された大会代議員全員（約1800人）による第一書記選舉は今回から中央委員（200人）による選出に逆戻り、党役員の任期は現状の中央レベル5年、地方レベル2年半が一律5年となった。また党指導部の三選禁止を原則としては保持しながらも、党員の3分の2の賛成があれば三選も可能と修正された。

7月3日 党大会最終日、新中央委員による中央委員会はヤルゼルスキ第一書記を再選、新政治局、党書記も選出される。政治局、書記局人事はヤルゼルスキ色の濃いものとなり、政治局員15人中9人は新人、またキシチヤク内相、シビツキ国防相、パリワ将軍、ヤルゼルスキ本人と、軍人4人が政治局員となった。グレンツブルク機関、イタリアを訪問（28日に帰国）。オジエホフスキ外相、ソ連のシェワルナゼ外相と会談。

7月4日 ヤルゼルスキ第一書記が記者会見、政治犯釈放の方針があることを語るとともに、教会との対話と理解の努力は国の発展のため重要と述べる。

7月10日 レフ・ワレサ、地下「連帯」との関係等について質問を受ける。

7月11日 国営PAP通信によれば、内閣は「社会・政治状況の一層の正常化」のため、政治犯や軽犯罪者の釈放に関する特別措置法案を国会に提出。

7月13日 著名な反対派知識人で旧KORメンバーでもあった経済学者エドワルト・リビンスキが死去。97歳〔本号14～15頁に関係資料〕。

7月16日 ワルシャワの夕刊紙『エクスプレス・ヴィエチュルヌイ』によれば、ポーランドで2番目の原子力発電所がボズナン近郊クレピッチに建設される予定という（1987年着工、94年操業開始予定）。

7月17日 国会が閉会、政治犯と軽犯罪者の釈放に関する特別措置法案を可決（但し主要政治犯が釈放対象となるかは微妙）。また、ポーランドのインフレ率が過去最高値に近づきつつあり、全企業の20%が赤字、残りの80%も値上げでかろうじて黒字を保っていると明らかにされる。「連帯」顧問ヘンリク・ヴェツ、非法組織への参加を理由に起訴される。この辺付けのカトリック系週刊紙『ティゴドニク・ポフュフェヌイ』によれば、1986年前半の物価は前年同期比18%上昇、賃金は20.3%上昇。

7月18日 ニエツカシュ蔵相とニエヴィアドムスキ建設・都市国土計画相が更迭される。新蔵相はサモイリク、新建設相はバイシュチャク。

7月19日 経済改革委員会書記局は、企業内の企業長の権限強化について検討。

7月20日 チブルコ厚生相、反アルコールキャンペーンは効果が上がっていないとラジオで語る。

7月21日 ワレサ、政治犯釈放に関する新法を「ブヤク、ミニクらは釈放対象にならず、釈放対象者にも忠誠宣言への署名を要求している」と批判。

7月23日 ワレサ、2時間にわたる警察での尋問の後、「大規模な政治裁判が行われそうな印象」を受けたと語る。5月31日に逮捕された地下「連」【22頁へ続く】

# 恩赦とグダンスク協定6周年について

## 「連帯」暫定調整委員会(TKK)

On the amnesty and the Gdańsk Agreement, TKK  
NEWS SOLIDARNOŚĆ, No. 74, 31 Aug. 1986

【編集部注】 以下は、1986年7月21日に開催された「連帯」暫定調整委員会〔TKK〕の会議のコミュニケと声明である。両文書には、ヤン・アンジェイ・グルヌイ（上シロンスク）、ヴィクトル・クレルスキ（マゾフシェ）、マレク・ムシンスキ（下シロンスク）、およびグダンスク、マウォポルスカ、西海岸、ヴィエルコポルスカ、ウッチ各地方の代表者が署名している。

〔訳：水谷 賢〕

### コミュニケ

### 声明

1 1986年7月17日に成立した「特定犯罪累犯者特別処理法」は、政治的理由による投獄者の大半の釈放を可能とするものである。しかし、検察官と裁判所には個別のケースの検討にもとづいて釈放を認める権限が与えられている。そのうえ、法律の構造それ自体が「連帯」指導者と多数の政治的活動家の釈放を排除している。この恩赦には、ポーランドにおいて政治的理由による投獄が生じる諸条件の廢止のための、いかなる措置も伴っていない。わが国の善のためには、表現の自由と全市民の行動の自由を実現する措置が絶対に必要である。われわれはこのことを、恩赦のたびごとに指摘してきた。わが国の最高の道徳的権威もまたこのような措置を要求している。ポーランド司教会も最近同じ立場を表明した。全政治囚の釈放と市民および労働組合の自由の回復を目指す諸活動の継続は独立自治労組「連帯」の第1の目標なり続ける。

2 「連帯」全国指導部たるTKKの活動の原則と範囲が討議された。

3 ヴィクトル・クレルスキが、本日以降、マゾフシェ地方を代表してTKKに加わった。

4 独立自治労組「連帯」マゾフシェ地方執行委員会のメンバーであるヤン・リティンスキがこの会議に出席した。

ポーランドの独立自治労組「連帯」は6年前に誕生した。グダンスク協定はポーランドに不可欠の社会的、政治的变化の道を切り開いた。「連帯」が15ヵ月合法的に活動したところで、政府は協定を破棄し、自身が批准した労働組合の自由の国際的権利をふみにじった。わが国の改革は中断された。独立自治労組「連帯」は地下に追いやられた。それから5年間、われわれの活動家多数が弾圧され、職を追われ、投獄された。

われわれの運動は弾圧に屈しない。独立自治労組「連帯」は今もポーランドのかつてない希望の源であり、独立労働運動は今も状況改善のための唯一の希望である。

独立自治労組「連帯」は、ますます悪化する労働条件や労働の権利を侵害する法律の準備、さし迫る環境の破局を前にして、その活動を統一し、労働組合の自由を守り続ける。

この9月、独立自治労組「連帯」は、労働の権利の防衛と全ポーランド人の労働条件と健康条件の改善のための行動を組織する。この行動は、「連帯」記念日の8月31日の行進から始まる。この行進に参加することによってわれわれは、「連帯」の理想を守って死んだ仲間を追悼しようとする。

# ポーランドの光 「連帯」

## 6年ぶりの人と街

工藤 幸雄

7月15日、グディニアの港から横浜に向けて出帆する船に乗るまでこの夏の1週間あまりをワルシャワで過ごした。以下は、その7日あまりの報告である。

### 1

ポーランド行は6年ぶりだった。前回は80年12月13日～81年1月3日である。そのさいの印象記は拙著『乳牛に鞍』(共同通信社版)に収めてある。あれは「連帯」運動の華やかな日々であった。あの折のポーランド入りの日付は1年後の戒厳令強行の日付となる。

以来、『ポーランド月報』を発行している「ポーランド資料センター」代表の肩書を持つ人間としてはビザ發給は諦めてもいたし、軍政ポーランドなど見たいとも思わずいた。夏休みをポーランド船上の「書齋」で送るという家人の発想に従ってみたら……ビザが出た次第なのだ。とんだ拾いものである。

ワルシャワの町はしょんぼりと見えた。哀れなワルシャワ biedna Warszawa といった感じである。前回は冬のきなか、街灯が1つおきにつく節電のため暗い大通りが、しょんぼりとした光景を記憶の底に焼きついているが、今回は夏のさかり、夜の街灯はぜんぶ灯っている。それなのに印象はどう問われれば、どん底の暗さと答える。

前回は表に出ていた「連帯」の存在が、たとえ町は暗くとも社会せんたいに明朗さを与えていた。人々の胸を飾っていた Solidarność のマークそのもののように、ポーランドの民衆にとって毎日が彼らのマニフェストの日々であるように映った。民心の昂揚は、あの年、12月16日、グダンスク造船所正門そばの広場に完成した「犠牲労働者記念塔」に象徴される。56年、70年、76年の労働者の死を忘れないための3本の十字架には、さら

に81年の戒厳令とそれに続く軍政の犠牲者の数を銘記するため、さらにもう1本の十字架が足されねばならないはずだが……。

「連帯」の組織と違って記念塔は、まだとりこわされてはいない。しかし、塔の周辺で労働者の団結を誇示することが禁じられては記念塔の意義は抹殺にもひとしい。記念塔は「連帯」の敗北の遺跡でしかないと言ったら言いすぎにしても、時代の名ごりをとどめる役割しか果たしていないだろう。

ワルシャワの町で「連帯」の痕跡を求めるようすれば「スタニスラフ・コストカ教会」の境内に行くことだ。そこには体制に虐殺されたボビエウシコ神父の墓がある。前号に掲載の写真(土屋氏撮影)に見るとおり、今も献花は絶えることを知らない。その背後の鉄柵には至るところに「連帯」の旗が張りめぐらされている。各地方の労働者が持ちこんだものだ。人々の胸からはずされたマークの代りにソリダルノシチの赤い文字は、ここにだけは生き永らえている。毎月、月末の日曜日には「連帯」を支持する信者の集まるミサがひらかれ、教会の周囲は街頭デモを警戒するZOMO(警察機動隊)を満載した輸送車でとりまかれると聞いた。教会は、「連帯」精神の保護者であるばかりか、「連帯」の存続を知らせ、「集会の自由」を行使しつつ、がっしりと体制と対立している。老人や病者のため日曜ごとにミサのラジオ中継(今回は聴く機会がなかったが)という「連帯」がかちとった名ごりもまだ生きている。

### 2

そういえば滞在の1週間、ついにラジオも聴かず、テレビも視なかった。うんざりしたり、絶望したり、腹が立ったり——ぼく自身の反応が充分に予想できたからだ。新聞もロクに読まなかった。

新聞売場のキオスクが夏休みのためか、さっぱりひらいていないせいもある。いちどだけ比較的丹念に目を通した党機関紙に「麻薬禍」が青少年のあいだに蔓延しているとの記事を見かけた。マリファナの話ではない、本物のアヘンが浸透しているのだ。農家の栽培しているケシを徹底的に取り締まれば禍根は絶たれるのだが、その権限は各県に委ねられており……と書いていたのが、いかにもポーランド的であった。アヘンの自家製造には、供出用のケシの実をとったあとでのskoma、つまり枯れた茎や葉で充分なのだ、ともある。常習者の数12万人とかあったが、手もとに新聞が見つからないので、この数字はウロ覚えである。いずれにせよ、絶望のどん底で薬物に逃避を求める衰れな若者たちのあがきが見えてくる。たとえ見せかけにせよ“眞実の報道”的にかけらくらいは見たような気がした。それだけ問題が深刻化しているということでもある(アヘンはアヘンであって宗教ではない)。

ぼくが住んでいた当時(1967~74年)に比べて、すべてが投げやりになった、一見してあのころより良くなった点は何も見えない。むしろ悪化の一途を辿っているのではないか。夏のさかりでなかつたら印象はもっと悪かったかもしれない。都心にそびえ立つ旧スターリン宮殿が全体によごれて見すばらしくなった。それと対抗するように光りかがやいて見えた俗称“東の駿”的高層住宅の4本の柱までもがもはや光ってはいない、ホテル・フォラムにも精彩はない、バスもよごれ、くたびれた。

そのバス代は昔は1.5、今は6ズロチ、公衆電話が昔は1、この9月からは5ズロチ、この1年のあいだのインフレ率は16とか18%と、どこかで読んだ。これまた深刻な問題となって政府を脅かしている。同じく9月からズロチが切り下げとなつた。1ドルが155ズロチとかだったのが200に落とされた。こんどの数字は切れがいいから覚えられるが、それも来年まで持つかどうか。12年までは公式レートの1ドルは24ズロチぐらいであった。155ズロチ=1ドルは155円=1ドルとそっくりだったが、そのズロチでドルが買えるわけではない。大学出、40すぎの科学アカデミーの研究員の給料が2万ズロチ、つまり2万円と聞いた。ところが、その彼が畳を相続し、お百姓にトラクターで麦刈を頼むと、5時間で5,000ズロチを払



わされるのだという。してみると、“労働者の天国”なのか?

二等航海士が「ぼくの月給(基本給)は10ドルだよ」と嘆いていた。155×10=1,550ズロチのことではない。月給6,000~7,000ズロチではやみドル換算で、それくらいにしかならないという意味なのだ。公定レートの切り下げの結果、やみドルはまた騰ったにちがいない。

「ふんだんにあるのはウォツカばかりです」と別の船員もこぼした。そのウォツカ1本は昔なら100、今は800である。ただしちかごろ1航海に割り当てる本数はなぜか大きく削られている。高級タバコとなると、1箱20本入りが400もある。ただし国産ではない。

ムロジェクの台本で「コントラクト」と題した2人芝居を見物した(120の入場料は日本人の平均月給がポーランドの10倍としても、まだまあ安いうちだろう)。舞台はパリ、ホテル暮らしの没落ブルジョアと、そこでの食堂で給仕づとめのポーランド人移民との会話で運ぶ芝居だった。そのプログラムにムロジェクが書いている。

「人間の全行動は埋めつくせない1つの穴を埋めることで成り立つ。その穴とは、われわれ自身である……／魂、それは存在の中の穴だ。だから、それは実体でもなくエッセンスでもない。要するに穴なのだ／ある人びとは、そこを通り越せば、向う側へ行けると信じている。だが、それならばと、だれが渡る気になろうか……？」

穴は永遠に埋まりそうもなく、ぱっかりと口を

あけている。ポーランド人は、せっせと、その穴を埋める作業に余念がない——絶望だけがある……

### 3

映画はワイダの新作を見そこねた。ワイダさんが何とか見せる機会をつくりたいと言ってくれたのだが。作品はコンヴィツキ（『ポーランド・コンプレックス』[中央公論社版]の作者）の小説「愛の出来事の記録」の映画化だ。自身、何本かの映画も撮っている原作者にある役を振り当たら、「みごとな演技でね、まえまえから、こいつはやれる奴とにらんでいたんだよ、ぼくは」とワイダさんは笑った。「それに検閲もOKだったしね」この秋に封切りの予定だ。

ワイダ宅にはラジヴィウォヴィチが現れた。言わずと知れた「……の男」の2作にマチエク父子の役で出た役者である。めがねをかけていた。あすニューヨークに出かけるのだという。

玉三郎をナスター・フィリボーヴナに仕立ててドストエフスキイ「白痴」の東京公演をめざしている、実現が決まれば来年には夫人同伴で日本に行くつもり——といくぶん白髪のふえたワイダさんは「白痴」台本の改作に8月いっぱいかかると話していた。

到着の翌日かにもう1人の映画監督ザヌーシの母親から電話がかかり、「息子はあいにくイタリアに出かけて」とあいさつがあった。ところがワイダ宅で聞くと、ザヌーシは夫人の自動車事故の報でイタリアに飛んだのだという。老母には仕事であるかのように言い置いた親思いのザヌーシの心中を思った（それでも、いつの間に結婚したのだろう）。

まだ計報がある。反体制の評論家キシェレフスキの息子ヴァツェクが、やはり自動車事故で即死した。ぼくの滞在中のことだ。ジャズ・ピアニストとして友人とドゥエットを組み、国際的に知られていた。作曲家でもある老キシェレフスキには痛々しい事件であった（いつか飲んだ時は上機嫌だったが……）。

「このごろ検閲はだいぶ緩くなったようだ」とは、官制の「作家同盟」入りを拒否して、体制寄りとはとても言えない老詩人の言葉である。検閲緩和の真否、またその程度は認めようもない。だ

が、買いこんだ本のあちこちに日をさらしていると、これも緩和のせいかと思える個所にぶつかる。コシチュシコ蜂起（1794年）の前史だから無理もないが、女帝エカテリーナと共に謀した史上最大の売国集団である「タルゴヴィツア盟友団」のことやら、秘密警察を中心とするロシヤによる圧制に抗する公然、非公然のジャーナリズムの活動、劇場の諷刺劇、つかのまに消えた民主的な「五月三日憲法」の夢……等々を読んでいると、戒厳令と今に続く軍事政権と、それに抵抗する人びとの姿が浮かびあがってくる。

「五月三日憲法」は1年足らずの命だった。「コシチュシコ蜂起」がスヴォロフのロシヤ軍の前に潰えるまで8ヶ月と経たない。「連帶」は18ヶ月の命しかなかった。

外敵が侵すために便利なのは内敵を醸成することだ。とすれば、ポーランドの歴史には「通敵者」が希であったとする主張は正しくない。つねにロシヤと手を結ぶ勢力はあったと考えていい。そう考えると、最近の「通敵者」が何者かは明白となる。しかもそれは民衆から盲信が寄せられていた國軍を中心とする勢力だった。

検閲の緩和も政治犯の全員釈放も、國民を裏切った“悔恨の情”的表明などではありやしない。暗すぎる絶望の現実にわずかにあけた明かり窓にすぎない。それ以外に与えるべき光はどこにもない。

### 4

ワルシャワの2日目、訪れてきたのが「連帶」のスポーツマンを務めたヤヌシュ・オニシキエヴィチだった。「記念塔」の落成式へ出かけるダンスク行の「連帶」専用列車で同じコンパートメントだった（同じく同室したピウスツキの孫娘とは収容所時代に結婚した）。

「面白いのは大使館のパーティによばれる時ですよ」と彼は話した。「われわれ反対派のグループと政府・党的グループが必ずできる。2つのグループがまじりあうことは決してない。にらみ合いというわけでもないが、ぜったいに話は交さない」いまや反対派の釈放で国際的名士の顔がすっかりそろうことになる。ワルシャワ大学の数学科で教えている彼を講壇から追放する動きが出た。

高等教育省のさしがねである。

「結局、首切りはできずじまいです。大学側は党员までが反対を表明したりして。そう思いどおりにはさせませんよ」

ポーランドの“二重性”——そんな言葉が思い浮かぶ。反対派、地下「連帶」もそうなら、闇ドル、闇市、在外ポーランド人の資本によるボロニア企業、地下出版——表側に対する裏側の健在という二重性はどこにもつきまとう。

乗船して翌日の朝食にゆで卵を注文した。出てきた卵の黄味が黄味と呼べないほどに白っぽい。ワルシャワで食べた卵とまるで違う。P L O (ポーランド海洋定期航路) の仕入れが国営農場から、ワルシャワ市民の買うのは個人農からの違いだろう。アメリカのトウモロコシが入荷しなくなったせい——との説明も聞いた。67年秋、ワルシャワで初めて食べた卵(そして牛乳も)に本物の味を喜んだ年月は過去に遠のき、再び戻るべくもない。ほったらかしにされると、悪化はどこまでも進行する証拠だ。水道の水もよごれ、海水浴場も水泳には不適、公害を解決する力は「社会主義」には内在しない。反対派のエネルギーを借りなくては「穴」はあきっぱなしなのだ。

ワルシャワ空港に降り立った夜、税関の検査は、われわれも含めほとんどどの人がフリーパスであった。出国の検査も楽なものに終ってほっとした。ワルシャワの町ではZOMOも警官も目ににつかなかつた。市内バスでは不払いを常習にしていると自慢顔のインテリさえいた。だれもが正直に忠実

に何かをやるという気を喪失して久しいのだろうか。

コンヴィツキと喫茶店で落ち合ったら役者のホロウベック(400ズロチのタバコを勧めたのは彼だ)や作家のユゼフ・ヘンもきていた。詩人、フィツォスキは戦前に建ったらしい大きなアパートの新宅で昼食をご馳走してくれた。たまたま盜難防止の警報ベルを設置中で、シュルツ研究の新著をもらった。アンジェイ・ブラウンからは彼の演説を刷った地下出版物などをもらった。「皇帝ハイレ・セラシェ」の名著をものにした旧友、カブシチンスキはアメリカに嫁いだ娘のもとへ去ったらしい。会えた人々は反対派であることを誇りにしているように見えた。口にこそ出さぬが、一様に次の機会を待つ覚悟と窺えた。船員たちの片言隻句もそう思わせた。それは5年先の「五月三日憲法」200年の1991年かもしれない、「コシチュシコ蜂起」200年の1994年になるだろうか。

もともと「社会主義」の「軍事政権」という異状な事態が永づきするはずがない。まして、国民全体を反対派に回した政権が……。1年また1年と、次の機会が近づいてくる——どん底へ落ち込めば落ち込むほど、ロシヤへの肩入れが深まれば深まるほど。反対派の人々——彼らがポーランドの唯一の光だとこの国の歴史は、そう教えてくる。ポーランドの人々は未来を待ち望みながら、愛想づかしの現在に耐えて生きて行く。

(1986、9、15記)



# 正常化の総仕上げ？

## 「連帯」が見た統一労働者党大会

【編集部注】 今年6月29日～7月3日にかけ、ポーランド統一労働者党第10回大会が開かれた。「連帯」時代の1981年7月に行われた前回大会では「党の民主化」が試みられたが、今回は党の統制力強化を狙った規約改正が行われ、またソ連共産党からゴルバチョフ書記長を迎えて戒厳令から「正常化」へ至るヤルゼルスキ路線への支持を確認する大会となった。この大会を前にした国内の反対派の反応を2つ紹介する。最初のは地下紙『週刊マゾフシェ』No.171（86年5月22日付）の論文、次は反対派の論客アダム・ミフニクの党大会へ宛てた公開書簡である。ミフニクは社会自衛委員会KORのメンバーで「連帯」派の中心的知識人。戒厳令と同時に拘禁され、起訴された後84年8月に恩赦で釈放されたが、85年2月に再び逮捕され、1年半後の今年8月に釈放された。したがってこの書簡は獄中で書かれたものである。この書簡の英訳は6月1日付の英紙『タイムズ』にも掲載された。

## 第10回党大会を前に ——正常化された党—— 『週刊マゾフシェ』

Tygodnik Mazowsze : Before the 10 th Congress  
Uncensored Poland News Bulletin No.14/86, 14 July 1986, London

1981年12月13日の戒厳令布告以後、党は軍にその地位を明け渡すことになると予測した者が多かった。実際、最初のうち党は軍および公安警察によってわきに追いやられたが、「連帯」が片付けられてしまうなり、体制内の文民公務員たちが前面に戻るとともに党も復権を果たした。現在もそのままである。幾人かの将軍（ヤルゼルスキ第一書記、キシチャク内相、バリワ書記ら）を除けば、非軍人の方が軍人より重要な地位を占めている。

國の鎮静を第一として組まれたヤルゼルスキのチームは、もっぱらネガティブな目標を推進せざるをえなかった。ここ数年、経済や民衆の生活の改革のための継続的対話のかわりに、体制は破壊的行動を行ってきた。ヤルゼルスキのチームは社会の抵抗を抑えつける強い力は持っていたが、国を導き、社会的経済的生活を指導する能力に欠けていた。それにもかかわらず、党自体の正常化

は達成された。

古いやり方、つまり公式には「レーニン主義的原則」とか「民主集中制」と言われるやり方への回帰がみられる。全権力は党書記たちが握り、行政部門が共有できる権力はごくわずか、党委員会の総会は、討論がなされたという形をつけるだけのものになっている。1980年8月〔「連帯」を生んだスト〕や、前回の第9回党大会で導入された改革など何もなかったかのようだ。81年の党規約では、地区、市、地方の党書記はそれぞれの地区、市、地方の党委員会の無記名投票によって、複数の候補者のうちから選ばねばならぬとされている。ところが、戒厳令中とそれ以後の党書記の交代は上からの指令によってなされている。党政治局は候補者1名だけを推薦し、その者が地区等の委員会の後援を得、記名投票で反対票なしに当選するのだ。1985年から86年にかけての冬、10数人の地区書記が交代させられた時の方針がこれであ

った。党規約違反のもうひとつの例は、ユゼフ・パリワ将軍が中央委員会書記に列せられ、内務省および司法担当となつたことだ。前回党大会でパリワ将軍は中央委員選に見事に落選している。ヤルゼルスキ将軍も中央委員会も、その彼を「招き入れる」権利は持っていないはずである。

党内部の状態がこれでは、もはや下部党員たちも党指導部と国民の間のつなぎ役として頼りにならない。党の下部党員向けアピールや脅しその他の試みにもかかわらず、一般的の党員はおむね沈黙したままで、「党の原則の実現」にほとんど熱意を示さない。彼らはたいてい思想的に忠実でなく、社会学的調査に示されるように、党指導部が適切と考える見解とはかけ離れた異端的見解を持っている。「連帶」以前もこういう状態だったが、今日では下部党員は忠実なふりすらせし、矢面に立ちそうな立場につくことは拒絶する。事実、中央委のモクシュチャク書記が社会科学アカデミーの会合で、「適當な候補者を見つけるのが困難になっている。難しい立場に立つのを断る者が多く、引き受けた者もしばしばひどく消極的なので、われわれが尻をたたいてやらねばならない」と述べている。

党大会を前にしたキャンペーンは急速に展開されており、党トップの相當に効果を狙った指導のもとに行われていることが見てとれる。キャンペーンの一環として苦情や不満も公表されているが、たとえば党機関紙『トリブナ・ルド』をみれば批判を許される範囲がいかに狭いかがわかる。党に属する労働者は賃金や社会基金や住宅政策についてはよく批判するが、純粋な政治問題に対しては何も言いつぶつがないように見える。マスメディアを操る者たちは明らかに、権力の行使方法——権力の集中や弾圧政策——に関する議論を望んでいないのだ。これは、市民側に立った政治思考を一切させない体制への復帰の徵候である。

党大会開催は遅すぎた。規約に従えば、前回の4年後にあたる1985年に開かれねばならなかつた。おそらく、ソ連共産党大会より前に開催するのは不適当と考えられたに違いないことと、もうひとつは——上層部の慎重な考慮の末——国会選挙前には党大会は開かないと決まったためだろう。この決定は中間官僚より党指導部にとってより都合よいものだった。中間官僚は、国会選挙で党への



ポーランド党大会の席上で並ぶ  
ゴルバチョフ書記長と  
ヤルゼルスキ第一書記

忠誠を表さなかった者は第10回党大会でその地位を失うであろうことをよく知っていたから。つまり、党大会の議席を分配したのはどこかの党機構といったあいまいなものではなく、ヤルゼルスキ将軍周辺の中央指導部だった。こうして、党大会が国会選挙後になった事実だけ見ても、より直接的な方法で党を導こうと望んでいることを明示したヤルゼルスキ将軍の成功の度合がわかる。

党大会の真の目的は何だろうか？ ヤルゼルスキ将軍が、自分の政策を実行してくれるチームを求めているのは疑いない。大会での人事の最終リストが彼の意図を示すことだろう。彼はリベラルなやり方で政府内的人事異動を行ってきたが、1981年の第9回党大会で受け継いだ党の指導的位置——中央委員会、政治局、書記局ほか全て——の入替えには慎重だった。今や前回大会の決定を忘れるができるようになった彼は、きっと多くの新顔を登用するだろう。それはおくとしても、今度の大会はヤルゼルスキ個人とその「路線」に対する党の支持を厳粛に確認するものになろう。彼はすでにモスクワのソ連共産党第27回大会でゴルバチョフに特に親しく迎えられたことで「認可」を得ている。同じ儀式がワルシャワでも繰り返されねばならない。ポーランド統一労働者党第10回大会は現在の内政・外交政策を確認するだろう。公式的には1981年の前回大会の路線は今だ拘束力をを持つとの誓言が発せられようが、実際のところわれわれは、不人気で社会的に有害な1982~85年の政策が継続されるものと思わねばならない。

# 党大会への手紙

アダム・ミフニク

List Adama Michnika do X Zjazdu PZPR  
"Solidarność" Biuletyn Informacyjny Nr.142-144, 25. 06. 86, Paris

私はきみたちの反対者だ。私はきみたちの党が自発的に民主的改革に着手する能力を持たないことを身にしみて知っている者の1人だ。きみたち党活動家はこれまで外からの刺激がない限り反応しなかった。さらに悪いことに、きみたちは言葉による説得には一切耳を傾けず、流血騒ぎになるまで放っておいた。流血が起きてから（実際何度も起こった）やっと改革について考え始めた。その体質は今も変わっていない。そして私の書く一語一語にこの意識がついてまわる。にもかかわらず私がこの手紙を書いているのは、悪を前に沈黙することは共犯者になることだと信じるからである。さもなくば、議論に対し懲役をもって答えるような連中にどうして手紙を書くだろうか。

最初に言っておくが、次の点については書かない——5年前のきみたちの民主的な約束の数々、経済の壊滅的状況、貧困層の拡大、労働者の生活の質と社会的成果に対する攻撃、きみたちの指導者らの尊大な自画自賛の声明の数々。非合法化された数百万人の組合「連帯」についても、また地下に追いやられた市民生活や文化生活についても書かない。良心の囚人である私は、きみたちの良心に訴えようとは思わない。かつて、逮捕された共産主義者は政治囚としての扱いを求めて闘った。今や権力の座についた共産主義者は頑として敵対者に政治囚としての扱いを拒んでいる。この事実だけで十分に雄弁だろう。囚人に加えられている弾圧や、あまりに巧妙なのでいったいどこで習ったのか不思議なほどのつらい挑発についてもきみたちは語らないつもりだ。党大会に向けて、毎日毎日倒錯的熱心さで私を裸にして検査するここバルチエヴォ監獄の看守たちに関する苦情も言うまい。これらの話題のどれに対しても、私は公平な発言はできない。被害者は決して客観的証人たり得ないのであるから。

だがしかし、私はきみたちの対教会政策の被害者ではない。今きみたちに語っているのは教会の



アダム・ミフニク

外の人間、一度も教会の説教壇を利用したことがないばかりか、きみたちに対する批判がすぎるとして一度ならず教会の偉い方々からおしかりを受けた者であることはよくご存知のはずだ。だからこの問題についての私の意見にひいきのないことでもおわかりだろう。

そこできみたちに言おう——きみたちの政策は近視眼的で危険だ。ポーランドにとってだけではない、きみたち自身にとっても。その政策の基本はオリジナルなものではなく、スターリン時代初期のよく知られたやり方の焼き直しだ。それはわれわれ囚人にに対して行っているやり方を一般の生活にも導入すること、つまり反対者を壊滅させるため、緊張と対立が起きるよう絶えず挑発することだ。われわれポーランド囚人共和国市民に関していえばこの方法はしばしば有効だった。きみたちは何人もの囚人を精神的に打ちのめすことに成功し、何人かを殺したり自殺に追いやることに成功した。そうした行きの倫理的評価はここではない。だがそれが成功を収めたのは確かだ。しかし、教会に対してはこの手法は敗北の運命にある。ポーランド史上稀に見るほどにテロが盛んだった

スターリン全盛時代ですら、教会は潰れなかった。大規模な迫害とでっちあげ裁判も、ヴィシンスキ枢機卿ほかの司教たちの投獄も役に立たず、教会は生き延びた。

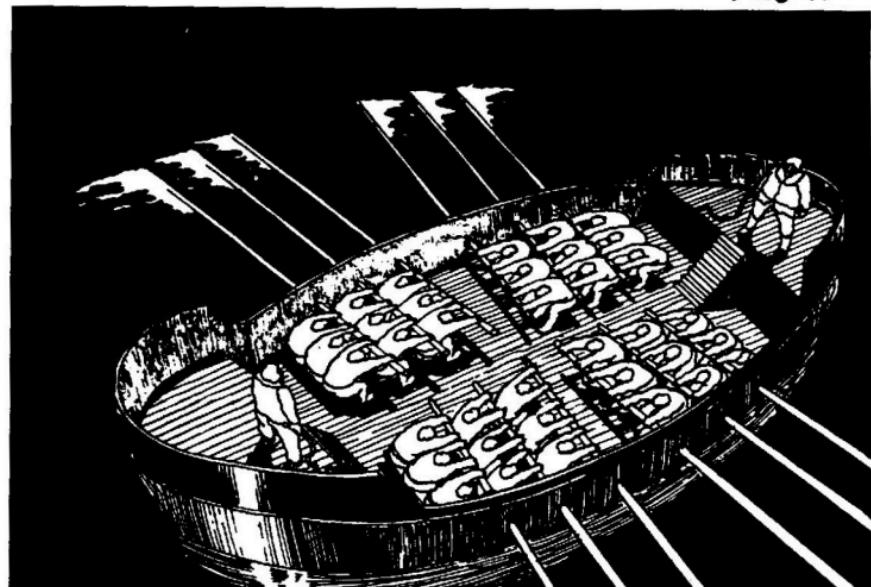
きみたちの中には、間違いだったのはヴィシンスキ枢機卿や司教たちを投獄したことではなく、釈放したことだった、と考えたり、同じ試みをもう一度やりたがっている人々がいる——教会との戦争が強迫観念または職業になってしまった連中が。きみたちがこういう連中に對して警戒してくれるよう切に願っている。彼らは愚か者だ。彼らはカトリックの非寛容という幻想や、きみたちの妻子への迫害、炎につつまれる火刑のまきの山と残忍な異端審問を持ち出してきみたちを脅すだろう。

だがそんのはたわごとだ。私を信じたまえ、私は不寛容には極めて敏感な人間だが、良心にかけてこう訴うことができる、ポーランドのカトリック教会は、宗派間の、およびその他いかなる形にせよ、憎しみをまき散らしたりしない。正真正銘非カトリックの私は教会の人々からいやがらせを受けたことは一度もない一方、暖かい真心と手助けを何度も受けた。

それでは職業的な反教会主義者たちの狙いは何か？ 嘘やごまかしでも隠せるものではない、彼らは全体主義独裁の極端な彈圧形態を望んでいる。当局の全体主義的機構と社会との対立を、国と教会の対立にすりかえようとしている。社会的・政治的対立を、宗教的対立にみせかけようとしている。ポーランド唯一の独立した組織【教会】に警察力を行使する口実を求めている。職業的反教会主義者たちは、この方法でポーランドの自由をめざす闘いの本質的意味に煙幕をかけ、全体像を壊らせ、ポーランド人と外国人に「これは全体主義との闘いではなく、文明精神と暗黒の迷信の、近代国家と時代錯誤の聖職者の争いだ」と信じさせたがっているのだ。

諸君、これは危険な火遊びだ。この方法では教会も「連帶」も打ち倒せない、それどころかポーランド国内の対立に新たな危険な力学を持ち込むことになる。十字架の周辺で騒動を起こすことによってきみたちは十字架に政治的な性格を与え、抵抗のシンボルにしてしまう。この結果きみたちは教会を反対政党のごとく扱うことになる。こうした展開はカトリックの司教たちの望むところと

MICHAEL



正反対である。あらゆる宗教的行為が反体制声明となり、あらゆる反体制声明が——日常的意識において——宗教的認知を受けるような状況を挑発で生み出すのは司教たちではない、きみたちなのだ。

宗教性が反体制性の同義語となる——きみたちはこのことをわかっているのか？ さらにその帰結は想像に難くない。聖界と俗界の区分が消滅し、双方におけるかたくなさと不寛容が高まり、対話のかすかなチャンスすら消え去ることだろう。なぜなら——これを忘れるなかれ！——現在の対立はまだ政治的対話に変えることができる、政策が本来の「妥協」の領域にとどまっているからだ。しかし宗教的対立は常に自らの道徳的・倫理的正しさを証明し合う場になる。そうなればもはや妥協は困難だ。アイルランドの歴史は、迫害された宗教を反体制イデオロギーにしようと試みた民族がいかに多大の犠牲を払っているかを示している。それゆえ、現在、あらゆる教会迫害政策は反国民政策である。

私のこうした言葉はポーランドの国民的利益を思う気持ちから出ている。だが、そこにはエゴイズムもまざっている——私は、不寛容がひどくなつた時、私の大切に思う人道的な諸価値が崩れ去るのが恐い。人道的諸価値が保たれているからこそ私は、対話と妥協の政策が現在の全体主義独裁よりポーランド人にとって有望な展望だと今でも信じることができるのだ。私の理性はきみたちに警告せよと私に命じる——教会との全面戦争に対する反応は、社会不満の血ぬられた爆発という形になろう、と。ポーランド人は忍耐強い民族だが、その忍耐にも限度がある。ポズナン〔1956年のポズナン事件〕、バルト海沿岸地域〔1970年12月事件〕、ラドム〔1976年の事件〕を思い出すがよい。軽はずみな行動は避けることだ、そうした行動はきみたちの先人にとっていかに高くついたことか。すべての独裁はいつか終わりを迎えることを忘れるな。イランの強大なシャーが、アルゼンチン軍事独裁が、ハイチやフィリピンの専制が倒れたのをきみたちも見ただろう。俺たちは違う、などと思うなかれ。例外はない、きみたちにも終わりがくる。ズビグニエフ・ブヤクや他の活動家を100人逮捕したところで変わりはない。民主主義は必ず到来する、ポーランド人が民主主義を望んでいるのだから。大切なのは、この変化が内戦や憎し

みや流血なしに行われねばならないことだ。だから、ポーランドの人々に、きみたちには力づくでなければ話が通じないと思われるような振舞いをするのはやめたまえ。力の論議への信仰を毎日毎日表明するのはやめたまえ、最後にはきみたちが誰から同じやり方で借りを返されることになる。その時、暴力の渦巻きを解き放った責任はきみたちに——きみたちだけにあるのだ。

私の言葉の中に憎しみの感情はない。不安が私に語らせているのだ。私は自由な1人の人間として（投獄されてはいるが）、自由な人間の言葉で（権利は奪われているが）、語っている。きみたちは自由な人間の言葉は好きでなかろうが。

きみたちはポーランド統一労働者党と名乗っている。きみたちを統一しているのが何なのか私は知らない。きみたちは労働者の党ではない、きみたちがどの程度ポーランドの党であるかも考えたくない。しかし、ポーランドを、すべてのポーランド人の祖国たるポーランドを統治しているのがきみたちなのを私は知っている。このことできみたちはある種の責任を担っている。その責任について考えてみてほしい、たとえ東の間でもよいから……。

バルチェヴォ監獄 1986年6月

アダム・ミフニク

〔訳：高橋初子〕



# ヤルゼルスキ将軍のポーランド——こぼればなし

Everyday Life in Jaruzelski's Poland

Uncensored Poland News Bulletin, No. 8/86, No. 17/86

☆クラクフ近郊、スタニアトキ村の保健センター建設委員会は地元農民に手紙を送り、「委員会のイニシアチブに参加する市民としての義務は免除されない」旨を伝え、「否定的態度」を示した農民の全氏名が当局に通報されると警告した。「これは脅迫ではない。善良な市民多数の一一致した要求である」。

『ヴィクトリア』 グロツワフ 48号

☆グダンスクの船舶機械センターの事務所のドアに、最近のぞき穴がとりつけられた。これは普通のぞき穴とはちがっていて、内から外ではなく、外から内をのぞくようになっている。研究者や設計技師たちが何の陰謀をたくらんでいるのかを、当局側は知りたがっているのだ。

『ナーシュ チャス』 グダンスク 53号

☆物事は弁証法的に考えよ! 国会の外国貿易委員会で、ポーランドはなぜ金をソ連から輸入しないでドルで購入するのかという質問が出た。外国貿易相が答えた。「金を買うのは交換可能通貨の国々でだが、だからといってその金がソ連産でないということにはならない」。

『N A I』 74号

☆聖母とポーランドの母。当局によって解散させられたカトリック知識人クラブ（KIK）グダンスク支部の90人が1985年3月、グダンスクの聖マリア聖堂再建費用として13万ズウォティ余を県知事宛てに送った。長らく返事がなかったが、9カ月後にワルシャワの「ポーランドの母」病院建設委員会から、寄金に対する礼状と領収書が届いた。KIKは寄金の用途の一方的変更の取消しを求めて提訴中である。

『ティゴドニク マゾフシェ』 159号

☆有効期限を抹消したトランキライザーを中心と

する医薬品がノヴァフタの薬局に出回った。これは、軍および警察の備蓄品および戦時に備えたいわゆる「門外不出」品の放出品であった。半時の市民用なら、まだ十分使えるというわけである。

『フトニク』 116号

☆2月10日の会議で文化省演劇局長は劇場支配人に対し、教会での演劇に俳優たちが出るのを差し止めなければ徹底手段をとると警告した。一方ジグルスキ文化相は美術館の館長たちに対し、反対派と密接な関係にある画家たちの絵画を買い入れないように命じた。

『ティゴドニク マゾフシェ』 159号

☆ポーランドTV局は、ポーランドの詩人、チェスワフ・ミウォシュの1981年のポーランド訪問時の1時間の映画フィルムのお蔵入りを決めた。これでこの映画が放映される見込みはなくなった。ワルシャワ文学博物館が問題のフィルムのコピーの購入を希望したが、TV局はこれをかたくなに拒否した。

『ソリダルノシチ ラジオ・テレビ』 36号

☆警察は党に尽くさなければならない。ブディッシュ内務省次官は、1月28日の国会内務委員会で演説し、内務省が直面している任務を並べてたうえで、きたるべき党大会が「清らかな状況」のもとで開催されなければならないとしたヤルゼルスキ第一書記の指摘に言及した。ブディッシュ次官は述べた——この言葉を念頭に置いて内務省は、各種の法的手段を用いて、残存する地下組織を根絶し、独自の出版活動を制限する活動を強化し、一層効果的に急進的聖職者の政治的活動を取り締まるつもりである。

『N A I』 77号

[訳: 水谷 駿]

# ありし日のリピンスキ教授

## ヤツエク・クーロン

le Professeur Lipinski tel qu'il était, Jacek Kuroń  
SOLIDARNOŚĆ, Bulletin d'Information, No. 145/146, 06/20.8. 1986

【編集部注】 1986年7月13日、経済学者で労働者防衛委員会〔KOR〕の創立メンバーの1人、エドワルト・リピンスキ教授がフルシャリで死去した。死の直前まで行動的な反対派の闘士だった彼の葬儀は7月17日に行われ、盛大なデモンストレーションの場と化した。葬儀の場で読み上げられたヤツエク・クーロンの弔辞を紹介する。〔訳：水谷號〕

KORの内部ではわれわれは彼のことを「教授」と呼んでいた。もちろんわれわれの中で教授は彼ひとりではなかったが、教授が学問のみならず人生についても教えているところはいささか学校にも似ていた。教授はわれわれの人生の先生だったが、われわれは小学生の集まりではなかった。

ウルススピラドムの迫害された労働者の救援活動に携わった人々は、やがて、国民にたいする自らの代表者が必要であることを理解した。はっきりとした名前とその名前で公然と行動する用意のある人物である。当時、この運動はあらかじめ失敗を運命付けられているように思われていた。われわれはこう聞かされた。「KORを設立するといった内容の宣言に14名が署名しても、その結果は分かりきっている。ポーランドの政治団が14人増えるだけだ」。「結構、それで成功だ」と教授が言った。「労働者と一緒に自ら進んで豚箱に入ろうとする14人の知識人だ！」。われわれがまだ疑問を持っていたとしても、教授がそれを解いてくれただろう。KORは誕生し、さまざまな世代の、さまざまな政治的傾向の尊敬すべき男女が集まつた。

われわれは小学生の集まりではなかったが、それにもかかわらず彼はわれわれの教授だった。1979年3月、講義をしていた（学術講座協会の運動の一環として）私の住まいが何度も武装部隊に襲われ、私の妻と子供がいわれのない暴行を受けたことがあって、私は講義を中止した。「一体どうして君は講義をやめたのだい？」と教授が書いてきた。「引き下がれば連中に圧力を強めてくるこ

とはよく知っているだろう」。私は返事を出して、自分の家で講義を続けるのがこわくなかったこと、しかし誰かに住まいを提供してくれるよう頼む権利は自分にはないと感じていることを伝えた。「私の家を使いなさい」。彼が答えてきた。私は、とても大事にしている古美術に囲まれた教授のきやしさなシルエットを思い浮かべた。何を危険にさらそうとしているのか彼はよく知っていた。1930年代末のある日のことを書いたルドヴィク・クシヴィツキの『想い出』のある一節が思い出された。——中央商業大学の各教室には人影がなく、そのひとつ入り口のところにリピンスキ教授だけがいた。まさにこの日、ホーランド人ファシストの一味が学校を襲撃すると脅していた。「君はそこで何をしているのかね？」とクシヴィツキがリピンスキ教授に尋ねた。「私が何をしているかですって？」びっくりしてリピンスキは言った。「抵抗しようと思って連中を待っているのです」。この小文が教授の全生涯を要約している。必要とあれば、闇の力に立ち向かい、抵抗する。…

教授の家で開かれるKORの集まりの間じゅう、彼は自分の肘掛け椅子に座ったまま、片手を耳に当てて、みんなの議論を注意ぶかく聞いていた。われわれはしばしば激昂してののしりあったが、彼、かくも経験に富み、かくも偉大な——実際彼は大柄でもあった——、そしてわれわれの中の最も若い者より60歳も年長の彼は、妥協することを、人の意見に従うことを知っていた。…

「連帶」の大会での彼の発言は次の言葉で始まっていた。「私が生まれて初めて演説をしたのは、

1904年のある集会でのことだった。そこで私は労働組合について話した。これが今日、おそらくは最終的に諸君のものになった。重要なことは、彼の最初の演説がかくも昔に行われたということではない。長寿はやろうとして出来るものではない。しかも、偉大な瞬間をいくつも経験し、抵抗の炬火を掲げ、闇のまっただ中を照らし、1年、2年の間に未来の勝利の種をまいた長寿者はいくらでもいる。教授の場合、とくに驚くべきは、彼が百年近くもこのようにして生きてきたことである。…

彼の家を訪問した最後の何回かのある時、われわれは社会的正義の制度を含む社会主义がはたして可能なのか自問した。われわれは、エーベスラヴィアにおける労働者自主管理の諸経験を想起し、市場と計画を両立させる可能性を検討した。左翼の人間にとてこれは悲しい議論だった。突

然教授が昔ながらの才氣あふれるさまで言った。「最も大事なのは、社会体制のいかなる形態をもけっして満足すべきものとは考えないことだよ。」

彼はわれわれの教授であったし、将来もそうであり続ける。というのも、彼の全人生が挑戦だったからである。彼を知る者は誰であれ、自分の消極性を疲労や高齢によって、あるいはもうやることはやったという理由で正当化することは絶対にできない。KORにおける教授との協力は、彼の弟子であるわれわれに、手に炬火を持ち続けることを義務付ける。この炬火を、不屈の、暴政を前に自己をまげず、しかし人の意見を受け入れ、妥協の用意のある人々の、世代から世代へと引き継いで行かねばならない。必要とあればたった1人でも闇の勢力に立ち向かう人々の。

## エドワルト・リピンスキ略歴

la vie du Professeur Lipinski

エドワルト・リピンスキは、1888年10月18日、ヒリツカ近郊のノーウェミアストで、砂糖工場主の家庭に生まれた。彼は、青年期の15年間をマルクス主義者として過ごし、この間ボーランド社会党左派の中で執筆、教育に携わった。

両大戦間、最初はワルシャワの中央統計局で、次いで1923年から1925年まで中央商業大学で働いた。1925年に準教授に、1928年に正教授に任命される。1927年に景気物価研究所を設立し、1939年までこれを指導。1928年に、ボーランド経済協会発行の雑誌『エコノミスト』編集部に入り、1934年から1939年までこの協会の議長を勤める。第二次大戦中、中央商業大学の後身、商業大学の組織者および学長として地下教育に参加。1945年から1950年まで国立経済研究所を、1946年から1948年まで国立銀行を指導。1949~50年、計画統計中央大学に、1950~1958年、ワルシャワ大学経済学部に勤める。1958年に退官。1951年にボーランド科学アカデミー会員に。

訳者  
一九八一年九月二八日、  
大会でKOR解散  
リピンスキ教授  
明一連



1946年から1948年までボーランド社会党員、その後統一労働者党に入り、1975年に離党。

1976年、他の人々と共に労働者防衛委員会(KOR)の設立に参加。学術講座協会(飛ぶ大学)の講義やヘルシンキ委員会の活動にも積極的に参加する。1981年の「連帯」全国大会に出席、ここでKOR解散声明を読み上げる〔『ボーランド月報』第8号、1982年10月31日、に訳出〕。彼の最後の公の発言のひとつはボヒエウシコ神父虐殺事件に関する公開状で、ここで彼はヤルゼルスキ将軍を厳しく断罪した〔同上、1985年1/2月号所収〕。

# チェルノブイリ後：原発の危険性をめぐる論争

After Chernobyl : Nuclear Risks Debated

Uncensored Poland News Bulletin, No. 16/86, 19 August 1986, pp. 39~41

ジャルノヴィエツにポーランド最初の原子力発電所を建設し、さらにその後多数の原子力発電所建設を進めているポーランド政府の計画は、あきらかにポーランド国民の間に多くの不安を呼び起こしている。チェルノブイリの惨事後、原発に関する危険性が彼らにとってあまりにも現実的なものとなったからである。この問題に関しては多数の論文が地下紙に発表されているが、議論はこれら非合法紙に限定されているわけではない。7月27日付けのカトリック合法週刊紙『ティゴドニク・ボフシェフヌイ』は、ポーランド科学アカデミー・エネルギー問題部長ヴォウォジミエシュ・ボヤルスキ博士による「核エネルギーに関してはもっと慎重に」という論文を掲載している。その1ヵ月前には、グダンスクの18人の科学者がズビグニエフ・メスネル首相に対し政府の決定に疑問を投げかけた公開状を送っている。

## 原発には慎重に

ボヤルスキ博士が、その見解の独立性で知られ、共産主義体制のもとでは反対派新聞に最も近いこの『ティゴドニク・ボフシェフヌイ』に自分の論文を発表したという、まさにこの事実こそが重要である。普通この新聞は検閲によって要求された削除個所すべてにマークを付けるが、それによれば4ヵ所に検閲の跡が明らかである。

ボヤルスキ博士はまず最初に、ポーランドにおいては人間の安全を犠牲にする核エネルギーは存在の余地がない、と宣言する。ボヤルスキ博士は、安価なエネルギーの必要性を主張し、旧来の方法でエネルギーを生産することの環境上の危険性に留意しつつも、「故障と事故、およびその間の事情と影響を隠し、偽るポーランドのこれまでのやり方」を指摘する。「公開のいかなる分析、調査、検討も行われず、眞の原因ないし責任者は一切明

らかにされない。こうした状況は、非効率的かつ欺瞞的な公式警告制度によってさらに悪化している」。この後に検閲で削除された部分がくる。

さらにボヤルスキ博士は、ポーランドの原子力施設がポーランド原子力機関や「装置および設計図の外国提供者」、すなわちロシア人によって検査されるだけで十分かと問う。西側とは言わずボヤルスキ博士はこう指摘する。

「原子力発電所の建設と運転に多大の経験を有する国々の多くが、設備の周辺に堅固な耐水性遮壁を設け、また、河川につながる開放式冷却システムを避けて高価だがより安全な閉鎖式システムを採用している」。この後、2番目の削除部分が続く。

つぎにボヤルスキ博士はワルシャワ近くに建設されるこれまでのところ世界最大の原子力発電所計画をとりあげる。これは開放式冷却システムによってヴィスワ川につながる。博士によれば、ワルシャワに所要エネルギーを供給する別の手段とこのプロジェクトを比較する「検証可能で信頼できる経済計算」は提出されていない。

ボヤルスキ博士は言う。ポーランドのエネルギー専門家によれば、「世界の経験——博士はここでもとくに西側と名指してはいない——を十分に活用し」、また最大限の安全性を保証するためには、つぎのことが必要である。すなわち、世界の指導的諸国が採用する基準に沿って施設を設計すること。こうした設計の使用について国際原子力エネルギー機関〔IAEA〕の許可を求める。必要に応じIAEAによる工事中止命令を認めること。すべての事故についてIAEAと関係諸国にただちに通報すること。すべての大事故についてIAEAおよび周辺諸国の専門家による調査を認めること。IAEAの指示はすべてただちに実行すること。こうした条件がすべての核施設に適用されねばならない——ボヤルスキ博士はこ

う述べているが、ここでまた検問がはいっている。ボヤルスキ博士は続ける。「こうした条件をポーランドで満たせるか否かはいまのところ明らかでない」。この後に4番目で最後の検問削除部分がある。

セントラルヒーティング用の最も簡単な自動バルブの量産や普通の浴室床材の生産さえまだできないポーランドのような国は、核エネルギーについて考えるにあたりもっと現実的かつ慎重でなければならない、こうボヤルスキ博士は結論している。

### メスネル首相への公開状

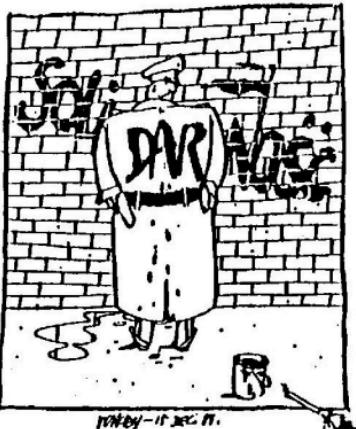
グダンスクの18人の科学者がメスネル首相に送った公開状は、一連の質問を提出し、これが公式のメディアで回答を得て国民的議論の対象となることを求めている。署名者たちは言う——自分たちが住むグダンスクちかくのジャルノヴィエツにポーランド最初の原発が建設されようとしている以上、われわれが原発の安全性の問題を提起するのは、思うに適切である、と。彼らが提起した質問は以下のとおりである。

\* ジャルノヴィエツに原子力発電所を建設することが決定された1970年代には原発事故による危険性は十分理解されていなかった。現在、原子力発電所周辺の人口密度に関する公式基準はどのようなものか？

\* 安全対策に関する当初の計画は、近年の国際的経験に照らしてその妥当性を証明できるか？

\* 原子力発電所のミスのない的確な運転は、とりわけ、関係するすべての労働の質の高さにかかっている。ポーランドの投資プロジェクトのほとんどすべてに関するこの面でのおもわしくない経験は、したがって、重大な不安を呼び起こす。原子力発電所に関するすべての労働が適切に遂行されるようどのような処置が取られているのか？

\* 核エネルギーの分野におけるポーランドの経験の欠如を前提とすれば、原子力発電所を専門的国際諸機関の加わる厳密な監視下に置く必要がある。このような監視のためにいかなる協定が結ばれているか？



\* 原子力発電所のミスのない的確な運転のためにには、最高の専門的能力を有する科学・技術要員の適切な訓練が重要である。専門的運転要員を訓練、選抜、査定する適切なシステムが考案されているか？

\* 原子力発電所の運転には、核燃料の生産、輸送、貯蔵の安全なシステムと核廃棄物の安全な処理方法の確立が含まれる。生じうる危険を減らすためにいかなる決定が下されているか？

ポーランド国民の間に当然の不安を引き起こした最近のでき事は、ポーランドで核エネルギー開発計画が社会的に受け入れられるようにするために、こうした諸問題について公然と徹底的に議論する必要があることを証明した——署名者たちはこう結んでいる。それゆえに、こうした諸問題に対する回答が公式メディアで公表されるべきである、と。

この公開状にはグダンスク工科大学のT・ソコウォフスキ教授以下18名が署名している。

知られているかぎり、これまでのところこれら質問に対する公式の回答はない。

〔訳：水谷 翔〕

# 官製労組とは非協力を クラクフ「連帯」の西ドイツ社会民主党に対する公開状

Open letter to the SPD, Małopolska Solidarność  
Solidarność News, No. 67, 30 April 1986

【編集部注】 以下は西ドイツ社会民主党員によるポーランド「友好親善」旅行に関して、「連帯」マウツィ・ボルスカ（クラクフ）地方委員会が発表した公開状である。西側諸国政府とポーランド現政権との間の「関係正常化」が進行中の今日、これに対する「連帯」の関心がどこにあるかを示す一資料である。

西ドイツ社会民主党のメンバーが、西ドイツの労働組合とポーランドの官製労働組合との間の協力の可能性を検討するためにポーランドを訪問したというニュースを知って、われわれは非常に驚くとともに失望の念を禁じえませんでした。

西ドイツの国民と政治指導者のいずれも、以下の事実を十分に承知していることと確信します。

1 現在ポーランドで公式に活動している労働組合は、1980年8月以降、多元主義の原則にのっとって結成された独立自治労組「連帯」その他の労働組合の合法的存在を否定した1981年12月13日のクーデタの結果として登場しました。この公式労働組合は独立労働組合運動とは一切無縁のものです。というのもそれは、党=政府当局の見え隠さない意図に基いて形成され、これに完全に従属しているからです。

2 ポーランドの勤労人民の圧倒的多数はこの官製労組を組織的にボイコットしています。この点はその組合員組織率の低さに現れています。党=政府当局は、買収や脅迫といった卑劣な手段でこのボイコットを破ろうとしています。この結果、官製労組は主として、国家に従属する人々によって構成されています。たとえば、工場幹部や統一労働者党員、公務員、年配者、年金生活者などです。

3 労働組合に関する現行法は労働組合の複数制度を排除しています。このために広範な支持を得ている独立自治労組は合法性を奪われたままで

です。戒厳令期間中に導入された政府当局の無法かつ弾圧的な法律によって、何千人という「連帯」活動家が職を奪われ、拘留・投獄されました。今なお獄中に数百人が閉じ込められています。「氏名不詳の犯人」が人々を虐殺しています。

以上がポーランドにおける労働組合運動をめぐる状況の現実であり、これを知らないということは誰にも許されません。西ドイツの労働組合とポーランドの官製労働組合の協力は、したがって、党=警察体制による弾圧政策に対する道義的支持と、ポーランドにおける人権抑圧の承認、そしてポーランド政府の国際的義務の不履行の黙認を意味することになります。

こうした条件の下では、われわれは、西ドイツの労働組合とポーランドの官製労組の協力関係の橋わたしをしようとする社会民主党員の試みを、長年にわたって平和的手段により全体主義体制に反対してきた国際的労働組合運動の連帯を弱める努力とみなさざるを得ません。

1981年12月以来わが国民に対し繰返し連帯の意を表明してきた西ドイツ国民が、この連帯を破壊するだけの短期的党利に基づいた政策に同意しないことを、われわれとしては望みたいと思います。われわれのこうした立場は、ポーランドの「所有者」と会見する一方で、ポーランド社会の眞の代表者とは語ることを拒否したウリ・プラントの決定に対してまき起こった批判によっても確認されます。ヨーロッパの安全は、自国民に対して戦争を仕掛ける政府を支持することによっては達成されえません。諸国民間の連帯のみが、ヨーロッパの平和と道徳的秩序をもたらすのです。

1986年2月21日

「連帯」マウツィ・ボルスカ地方委員会

〔訳：水谷 駿〕

# 一層の相互協力を

## ポーランド反対派のチェコスロヴァキア反対派にあてた手紙

Polish Opposition Writes to Charter 77 & VONS  
Uncensored Poland News Bulletin, No.16/86, 19 Aug. 1986

【編集部注】 以下は、チェコ語の情報紙『インフォルマツェ・オ・ハルチエ』No.9/86に発表されたポーランド反対派諸組織のチェコスロヴァキア憲章77および不当弾圧犠牲者防衛委員会(VONS)にあてた手紙の要約である。いずれも各自の目的と活動に関する情報の交換の重要性を強調している。

[訳:水谷 驥]

### 科学社会委員会からの手紙

自らの命運を決定する個人と社会の権利を求めるあなた方の不屈の闘いと不正に対するあなたの感受性は、われわれが最も尊敬するところのものです。われわれはいずれも、すべての独立したイニシアティブが暴力によって圧殺される国に生きています。われわれが尊敬するのは、あなたがたが職を失い、自由を失う危険にあえて身をさらしながらも公然と活動を進めていることです。…国民文化を押さえつけ、その一層の後退を不斷に強制する政治的、社会的体制のもとにあっては、個人の自由な発展の余地はありません。…このような状況に抵抗する効果的な唯一の方法は、社会の中に独立した自発的な組織を作ること、公式の制度に代わる独立した思想、独立した芸術、独立した青少年教育のセンターを作り上げることです。…実際の探求と自由で開かれた精神の形成がわれわれの目標です。あなた方との連絡の確立、情報の交換、そして相互協力が、この目的の実現のために決定的に重要です。これは可能だと信じます。

ワルシャワ 1986年5月30日

### 独自的教育グループからの手紙

われわれの将来は、最も若い世代のソビエト化の危険にわれわれがいかに対処できるかにかかっています。これはポーランドだけではなく、東ヨーロッパ諸国すべての問題です。ソ連ブロック諸国のすべてにおいて、青少年たちは、党の言うことだけが真実であり、政府の布告以外には可能な道はなく、共産党支配下の世界だけが世界である、という確信に従って育てられています。わが子た

ちのこの精神的奴隸化に立ち向かうことはわれわれの義務だと考えます。…現在の最も重要な課題は、各国の反対派グループの孤立を打ち破ることでしょう。われわれの共通の運命に対する自觉、わが隣人たちの問題に対する認識、そしてポーランドのみならずチェコスロヴァキアやハンガリー、ウクライナ、バルト諸国の偽りのない歴史に関する知識、こうしたことこそが、相互の偏見を打破して、共産主義全体主義体制に対する闘いにおいて眞の連帯を築くために必要とされています。

文化の問題についてあなたがたと協力関係を作ることを望みます。ポーランドの読者に、チェコスロヴァキアの歴史やプラハの春、チェコ反対派の活動、現代のチェコ亡命文学などに関する文献を読めるようにしたいと思います。チェコスロヴァキアの生活と反対派の活動に関する情報をわれわれの雑誌(『トゥ テラス』や『KOS』)に掲載する用意があります。思想と経験の恒常的交流のための条件を作らなければなりません。

ワルシャワ

### 保険社会委員会の手紙

連帯の精神にのっとった和解と理性は、人々が健康な精神的、肉体的条件を享受できる21世紀へと向けてわれわれを一層接近させると考えています。空虚なイデオロギーと人間および自然に対する軽蔑が20世紀の終わりを画すことがあってはなりません。…われわれは、あなた方の活動に従い、協力の道をみいだせることを望みます。

ワルシャワ 1986年5月

# 「連帶」運動の与えたもの

『労働情報』編集人 前田 裕悟

ポーランド「連帶」と、日本労働運動の現状との比較の中で、私なりの思っていることをつづってみたいと思う。

今、日本の運動の中で焦点になっているのは、まぎれもなく、国鉄行革・分割・民営化の動きであり、それに対応する労働戦線側の様々な現象の中に一切が凝縮されている。

政治、経済上からくる権力、資本の意図についての分析は、本稿から除いて、労働運動サイドからみた場合、行革攻撃の本質は、戦後日本の経済発展の中で、積年つもって来た国家的な矛盾も含めて、一切を労働者に押しかぶせてきたということである。

本来、この攻撃には、労働戦線は、総体として総反撃に出るべき闘いであったが、残念なことに、オイルショック、世界的な不況と同時に、ストライクの失敗以来、労働陣営の中に、次の時代への展望が喪失してしまう結果をもたらしていた。この事は、総体として、反撃の中から、労働者解放へと目指す志向よりも、体制の安定化と、その中の労働組合の併存を望む動き、これこそ資本が最も歓迎し、パートナーとして迎え入れられる性格のものであるが、それが露骨に出てきた。

まず同じ公労協の中から、全電通の動きが始まっている。情報化社会の中での成長部門としては、赤字部門の国鉄、郵政と同列に論じられてはたまらないというのが第1であり、そのためには、公共事業体としての制約から離れて、民間企業体として、収益第一を優先し、そのためには、公労協からの離脱、企業との共存を計るための意識変革、全民労協への率先参加としてあらわれてくる。

それは、労働陣営の中に、中曾根共同軍が総評運動の中からあらわれてきたことを意味しているし、資本の手先として、内部攪乱の役割りを果したのである。

専売と電気の民営化の実現は、その意味では体制側の予期していたであろう抵抗もなく、むしろ協力のもとに成立したことは、国鉄の孤立化を決定的にしたし、さらに以降もつづけられるであろう地方行革への“オドシ”として受け止められる状況をつくりだしていった。

国鉄内においてはどうか。動労は、“労働運動の冬の時代”と規定して、180度の転回を行い、第2組合の鉄労と結び、全施労も加え、それのみならず、「真国労」なる分裂組織を発足させ、当局との共同宣言をはじめ、分割・民営化路線を支持し、あげくの果ては、総評脱退にまでいたくなるのである。

そこにあらわれる思想は、仲間を蹴落しても、自己の保身を計る考え方以外の何物でもないことが、堂々と横行したのである。

このことを総体的に完成させようとしているのが「全民労協」路線である。経営基盤の確立した企業の存続、そのためには、合理化と人員削減も容認する。切捨て労働者は放置する。それでも労働組合は残り得るし、その連合体は、社会的に、労働者管理機構として役割りを果し、プレッシャーグループとして発言力を持とうというものである。

その上に、戦後の総決算を図るものとして、労働法制の再編が、法的に準備されつつあるところである。

このように見えてくると、私達を取巻く環境は、全く絶望的かということになるが、それは必ずしもそうではない。

第1に国際情勢の流動である。極く短期的にみても、79年のイラン革命、ニカラグア革命、80年の光州ミューン、ポーランドのストライキ、イギリス炭労の長期にわたる闘い、及び、フィリピンの人民の力によるマルコスの追放とアキノ政権の誕生とみてくると、発火点をかか

れる中、南米の情勢、流動するパレスチナ、とみると、単に日本だけが、國外にあってという訳にはいかない。

現に今一番困難になっている國鉄労働者の中からも、聞いの人はあがっている。國労の組合員であるが故に選別され、人材センターに放り込まれ、國鉄改革法案が通過後は、精算事業団行きと、ラク印を押された労働者が、どん底の中から、捨身の闘いが始まろうとしている。ハントに入る労働者、独自に不当労働行為として提訴する労働者と相次いで各地で起こっている。だが、残念なことに、國労それ自身も、総力をあげて反撃という事になつてはいない。

造船産業に於ても同様であり、相次ぐ不況と、合理化で、因島、相生を始めとして、町ぐるみ失業の状況が現出し、行革のシンボル化されていた来島ドックも、不況倒産の直前にまで来て居り、一大社会問題化する要素は従来の比ではない。その上、労働組合が労働者を守るよりも、企業を守ろうとするのであるから、そこでの闘いは、また異なった視点からの反撃が必要となってくる。

ポーランド「連帯」との比較でみた場合、政権の相違はあるにしろ、官僚体制の中から、抵抗から始まって、立上り、圧倒的な労働者を組織し、権力の中枢と渡り合った「連帯」の運動は、まさしく一つの教訓である。

注目すべきは、決起と同時に、自ら管理、労働者の自治という方向性が提起されたことである。これが、社会主義官僚体制下の多くの人民に受け入れられた事は注目に値する。

その「人民の海」があった故に、「連帯」は弾圧につぐ弾圧の中でも、地下指導部を維持しつづける事は可能であったろうし、全政治犯の釈放という所まで持つてこれたのであろう。

では私たちに、その条件はないのか、そうは思わない。私たちはこの10年にわたって全国労働者討論集会を開催してきた。この集会は、未だ労働運動の原則を維持し、闘い続ける南大阪の金属、港湾の労働者と、全国各地で点在し、孤立化する中で闘う労働者を、「反JC」、体制内化運動に反対のスローガンのもとに横に結ぶ

ことに成功した。また、第1回集会決議で、「労働情報」の再刊が行われたのである。

また8回大会からは、「連帯」の「労働者の権利宣言」を見習って、私たちの運動の展望と、要求を集成する「労働者宣言」づくりが始まり、2年間の全国各地での討論を経て、第10回集会で採択される結果をもたらしたのである。

もちろんのことではあるが、形だけを見習つたらいいというものではない、置かれている条件が異なる以上、それに伴うあり方がないと現実化はしないであろう。「連帯」の場合、「社会自衛委員会」は、思想的、政治的影響を与え、全体像を生みだしていったと思うが、日本の場合、それに対比さるべきものを、私たちは持っていない。

更に、今回の衆参同日選挙の結果からみれば、総評、同盟の集票機構の役割も崩れたということであり、既存組合の空洞化は、誰にもわかる。その意味で、私たちに問われているのは、組織があつてもなきが現状の中での、一からの組織化である。同時にそれは、戦後日本型労働運動の全面総括の上に立って、組織論も含めての検討が必要になってくるだろう。重ねていうならば、その作業は、単に日本1国にとどまらない課題を背負う事も自明である。

### まえだ ゆうご

1950年 大阪中央電報局に入る。

1962年 全電通大阪中電支部執行委員。

1971年 中電支部解散と共に職場におりる。

1980年12月 電電民営化に反対、全電通の協調路線に反対し、脱退。大阪電通合同労組の結成に参加、委員長に就任、現在に至る。



【2頁より続く】**「連帯」**指導者ズビギニエフ・ブヤクとの関連で、検察局は「連帯」顧問知識人プロニスワフ・ゲレメクに対する本格調査を開始（ゲレメクは身柄拘束はされていないが、フルシャワを離れることは禁じられている）。フルシャワのラジオ、既に369人の囚人が釈放されたと伝える。

7月25日 反対派知識人ヤツェク・クーロン、ブヤク逮捕に関する10回目の尋問を受ける。肉および肉製品が8月1日から8%値上げと発表になる。ポーランド初のコンピューター・ショップがグディニアで開店。イタリアの教会からの贈り物の他にポーランド語の非合法出版物を積んだイタリアのトラックが国境で拘留。翌日、出版物のみ押収されて釈放される。

7月28日 フルシャワ・ラジオの世論調査によると、公式報道が信用できると答えたのは3分の1に過ぎなかったという（残りは西側放送や地下出版の方を信頼していることになる）。

7月29日 フルシャワ軍事法廷で開廷予定だった地下指導者タデウシュ・イェディナクの裁判が延期になる。ウルバーン政府スポーツマン記者会見、「恩赦特別法は釈放される囚人に法的公共秩序の尊重を求めていただけだ」と、政治的忠誠宣言を釈放条件にしているとの西側報道を非難。党大会でヤルゼルスキが述べた社会協議評議会創設案については、恩赦と直接関係ないと語る。党政治局が会合、経済は上向き傾向になってきたが貿易と建設が不振のため収支は赤字と報告される。

7月30日 ポーランド政府保証の対米債務約17億ドル（当初1982～84年返済予定）、1990～96年への返済繰り延べが、両国政府間で合意。

7月31日 昨年2月に2年半の刑（のち2年に減刑）を宣告され服役中だった「連帯」指導者ボグダン・リスが釈放される。新恩赦法が検事総長からの特別申請に応じて判決を破棄する権利を最高裁に認めているため。著名政治囚の釈放第1号となったリスは、釈放にあたり何らかの条件や宣言は要求されなかつたが、行動には注意するよう警告された。だが自分は今後も労働組合や人権運動に積極的にかかわってゆくと語る。8月1日のフルシャワ蜂起記念日を前に、聖ヤン教会のミサ後約1500人が無名戦士の墓までデモ、「政治囚釈放」「ワレサ」等と叫んだが逮捕者はなし。

8月1日 ブヤク逮捕に関してワレサが10回目の尋問を受ける。ポーランドのIMF再加盟後初のIMF調査團が1ヶ月にわたる経済状況調査を終了。

8月3日 リス、グダンスクで数百人の群衆を前に、「政府は『連帯』を合法化すべき」と語り、全政治犯

釈放を訴える。

8月4日 既に6927人の囚人が釈放と伝えられる。8月6日 リスと同時に有罪判決を受けた獄中の反対派知識人アダム・ミフニクが近々釈放と伝えられる。非合法出版物への関与で起訴されながら病氣で裁判延期になった詩人ロタール・ヘルブスト、西独での治療のためのパスポート申請を却下される。

8月8日 ポーランドと英國政府、1985年返済分の債務1億1900万ドルの繰り延べで合意。アガニスタンのカブールでソ連、ポーランド両大使館がゲリラのロケット弾を被弾。イスラエルのラジオはイスラエルとポーランドがこの秋相互に代表團を送る、これは外交関係樹立へのひとつのステップである、と伝える。

8月11日 アダム・ミフニク釈放される。ビドゴシチ地区「連帯」議長ヤン・ルレフスキにメーテーの抗議行動指導の科で罰金3万5000ズウォティまたは懲役70日の判決。ルレフスキは懲役の方を選ぶと語る。

8月12日 ウルバーン政府スポーツマン定期記者会見。従兵拒否問題に関し、多くの場合従兵拒否は宗教的理由からであり、消防士、警備員、看護士などの代替義務を与えられているが、それすら拒否して服役中の者もいると語る。また、この問題に関連する「重大な犯罪」により拘留されている者2名（「自由と平和」運動のJ・チャブトヴィチとP・ニエムチク）もいると述べる。

8月14日 ワレサ、ブヤクとの関連で11回目の尋問。この後ワレサは80年8月スト開始6周年を記念して70年事件の碑に献花。服役中の「独立ポーランド連盟」（KPN）指導者L・モチュルスキは危篤の父に会うための保釈を認められず、父親は死亡。クーロン、Z・ロマシェフスキもブヤクとの関係で尋問。

8月15日 母聖母被昇天日、チュンストホヴァでのミサに10数万人が参加、「連帯」旗も多数見られた。グレンツ橋機関は、最近政府が突然、「視野を広げ寛容とヒューマニズムと他人の信仰の尊重を教えるため」公立学校に宗教の時間を導入する必要を認めたことに驚きを表明。中央統計局は6月の経済実績を発表。前年同月比で貿易はダウン、労働生産性は3・4%上昇。

8月17日 グダンスク聖ブリギッダ教会のミサにワレサ、クーロン、ミフニク、リスが参加。数千の群衆にワレサは「労働者は政治、経済、社会改革を考え要求し続けねばならない」と呼びかける。

8月18日 L・モチュルスキ、父親の葬儀のため2日間保釈。

8月19日 ドメラツキ法相が「ブヤク、フラシニュクを含む全政治犯の釈放の可能性がある」と語ったと伝

えられる。日本の朝日新聞、5月初旬のポーランド放射線防護中央研究所の調査でポーランド各地に「特に放射能値の高い地点」が発見されたと報じる。

8月20日 官製新労組執行委が会合、最低賃金引き上げが急務と議論。ポーランド規格品質委員会の調査結果によれば、対象工場365のうち190工場の製品にひどい規格不適合がみられたという。

8月21日 ワルシャワ地下「連帯」執行部にZ・ブジュー、K・ブコフスキ（いずれも仮名）の2名が新規参加。KPN活動家2名が釈放される。

8月23日 ドメラツキ法相、ブヤクも釈放の可能性ありと語る。

8月24日 公式統計によれば、ポーランドで生産された2314種の医薬品のうち、今年第1四半期に640種、上半期末には1085種が入手不能という。

8月25日 西独司教評議会代表団がポーランド訪問、ヴィシングスキー枢機卿、ボビエウシコ神父の墓を訪ねる。

8月26日 西独内務省によると8月初めの3週間に西独で政治亡命を求めたポーランド人は1102人、今年に入りからの総計は6000人という。ウルバン、記者会見でチェルノブイリ原発事故のため外国人旅行者が4万人減り、600万ドルの損害、と語る。チェンストホヴァの聖母記念日、平日にもかかわらず約14万人が祝典に参加、西独司教代表団も列席。9月1日から国内電話料金が35%、電話新設料が50%値上げと発表される（新設料金は平均月収の約2倍）。ポーランドの電話普及率は人口100人当たり6.34台。

8月27日 服役中の知識人コンラッド・ピュレツキ（ベンヌムはマチエイ・ボレスキ）の母が、病身の息子の釈放を求めるアピールを発表。獄中の著名政治囚が不当な扱いを受けているとの情報が伝わる——元「連

帶」ワルシャワ地区副議長S・ヤヴォルスキは理由もなく狭く暗く換気の悪い独房に24時間閉じ込められ、元「連帯」ワロツワ地区議長のワディスワフ・フラシニクは裸での身体検査を拒否したため弁護士との面会を許されない、など。ポーランド食肉輸出公社長は、チェルノブイリ事故後西側の「神経症的」輸入制限で2500～3000万ドルの損害をこうむったと語る。8月29日 31日のグダンスク合意6周年を前にフレサが声明を発表。警察力と反民主的法律に頼る当局を批判、人々は自己の運命の決定権を奪われて無力化しているが、グダンスク合意は重要性を失っておらず、合意内容の実現こそ経済・社会・政治危機解決への道と述べる。ワレサ、クーロン、ロマシェフスキがブヤクとの関係で尋問される。

8月30日 ワロツワとビエルスコ・ビアワなどで翌日のグダンスク合意記念日の演説を防ぐため活動家が予防拘禁される。

8月31日 グダンスク合意6周年記念日。各地での記念ミサにそれぞれ数千人が参加、ミサ後に「連帯」スローガンや指導者の名を呼びながらデモが行われ、数十人の逮捕者がいた。ポーランド政府、通貨ズウォティの対ドル交換レートの17.6%切り下げを9月1日から実施と発表、これにより1ドルはこれまでの170ズウォティから200ズウォティに。日本の桜内元外相と土屋参議院議員がワルシャワを訪問。

9月2日 8月末に心臓発作を起こしたJ・モチュルスキ、検査のため刑務所外の病院へ行くことを許される。

[訳編：高橋初子]

## 編集後記

☆ヤルゼルスキ政権が政治囚の全面釈放に踏み切りました。その基本的な意図が、西側に対するイメージの改善にあることは、マスコミがこぞって指摘するところです。それだけ経済の苦境が抜き差しならない状態にあるということでしょう。

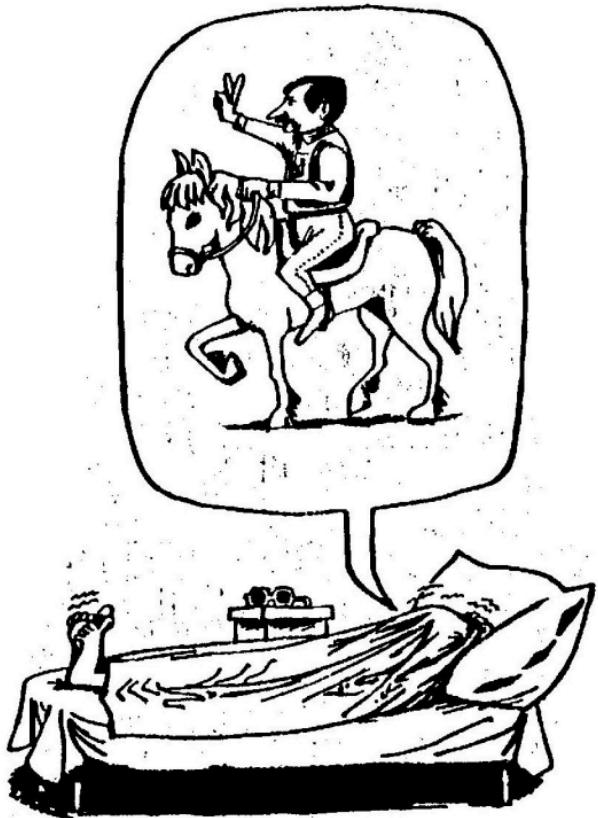
☆もう一つ忘れてはならないのは、「連帯」が内外の世論と結んで押し進めてきた政治囚の釈放を求める大キャンペーンです。この問題が国内的、国際的な政治的焦点たりつづけることに、ヤルゼルスキ政権は耐えられなかったのでしょうか。

☆フレサ委員長は「この措置が多元社会への道を開くことを期待する」と述べたと伝えられます。これはあまりにも楽観的過ぎるのでは、と思います。

これまでの何度かの恩赦がすべて、その直後からまた新しい政治囚を生み出してきた（しかもその顔ぶれはいつも同じ、すなわち「連帯」指導者たちでした）事実を見なければなりません。

☆しかし、それにしても、4年半にわたり地下にあって現政権に対する抵抗闘争を指導してきたZ・ブヤクまでも釈放しなければならなかった事実は、現在のポーランドにおける力関係の一端を示すものです。「連帯」の力です。

☆『月報』もこの秋で満5年になります。今後も一層のご協力を！ 1986年9月19日 み



Jaruzelski's nightmare

発行所・ポーランド資料センター

〒101 東京都千代田区三崎町2-10-5 一国ビル3F  
電話 03-261-2585 郵便振替 東京 2-81069

Center for Polish Research %Kazukuni Bldg. 3F 2-10-5 Misakicho Chiyoda-ku Tokyo 101

事務所は月・水・金 14:00~17:00

定価400円・年間定期購読料4600円(送料共)